目、耳、心

バユ・バグス・マヘンドラ
日本語・日本文化研修留学生、インドネシア

「外国で暮らす」と聞くたびに、皆さんの頭の中で何が思い浮ぶ？自国で食べたことがない料理を味わってみることや、独特な街をぶらつくことなど、楽しいことが思い浮かぶかもしれない。それとも、基本的なコミュニケーション手段とする言語を理解する難しさや、「なんで皆こんなことをやってんだろう」と思うぐらい習慣の違いなど、日々心を悩ませたり、面倒くさかったりすることも思い浮かぶかもしれない。自国を離れて、目的を達成するために、外国で暮らすには、その両方のことを立ち向かうしかないわけで、頭の中で思い浮かぶのは当たり前だと思う。

僕、バユ、インドネシアの国民として、日本語と日本文化を学ぶために、日本、和歌山県にやって来て、1 年間和歌山大学で勉強している。この文章を書き終わった時点で和歌山に来て、まだ 1 年間経ってないけど、前述したことを両方とも体験した。

和歌山に来る前に、高層ビルや、アイスクリームを食べな ら楽しそうに話している若者たちや、流行りのファッションの服をディスプレイしている洋服屋さんなどの光景を思い描いたけど、和歌山行き電車の車窓から目にした光景は僕を騒がしさから離して、山々に囲まれている場所に連れてきたかのようだ。しかも僕が住んでいるところと大学も高台に位置している。住んでいるところの周辺は坂ばかりだから、来たばかりのとき、下り坂と登り坂しか知らなかったほどだ。しかし、時と共に、もう一つの坂を発見した。それは「まさか」だった！僕が住んでいるところから 23 キロメートル離れたところ、紀美野町というところが ある。12 月の中旬に友達とそこに旅して、その町の絶景を見た瞬間、「僕って今まで 遠くを見る気持ちがないから、新しいことを発見したことがなかったんだな」と気が付いた。紀美野町に銀色っぽく見えるススキ草原が広がっている。秋の清々しい空気と高台から見える紀美野町の風景に「目をデカくして、遠く前を、右を、左を、上を、下を、後ろを、見て、新しいことを発見しないといけない」と僕は実感させられた。まさか！生石高原（おいしこうげん）と呼ばれているこのススキ草原から大事なことを教わるとは。

日本では、僕は二人の日本人と一緒に暮らしている。その一人は前田洋平という男の子。彼は僕より七つ上だから、いつも「洋さん」と呼ぶ。彼は和歌山県の田辺市に生

まれたから、関西弁が強い。和歌山に来た ばかりのとき、洋さんも、皆も、関西弁で話しかけたから、皆が言っていることを理解するのに苦労した。標準語と全然違うように聞こえる関西弁は「僕は外国人なのに、なんで皆が関西弁で話しかけてきたんだろう」と思うぐらい、僕をイラつかせたときもあった。しかし、時が経つにつれて、すべてが真逆になった。僕はむしろ皆に和歌山弁と混ざったりする関西弁で話しかけてほしいほど、関西弁にハマるようになった。 2016 年 12 月 31 日に洋さんと、もう一人女の子の友達のしおりと、3 人で磯ノ浦に最後の日の入りを見に行った。陽差しで煌 めく砂、心に響く波の音、伸びていくヤシの木の影、言葉で描き切れないそのときの 美しさ。西へ沈んでゆきながら、その年の最後の太陽は「洋さんみたいな和歌山県民が今まで関西弁で話しかけてきたのは耳を澄ませて欲しくて、方言を通じて、仲良く

なりたいわけだよ！」と僕にラストメッセージを送ったかのようだ。まさか！関西弁が人間関係のことを教えてくれるとは。

ここに来て、半年以上住んでいた 僕にとって和歌山は二番目の故郷みたいだ。インドネシアに帰国したら、和歌祭りで知り合った高校生たち、ユート、リョオ、と話したことや、紀美野町に住んでいる子供たちと庭で鬼ごっこしたことや、和歌山城の三階から夕暮れを眺めたことなど言いきれないぐらい沢山の和歌山で過ごしたことが恋しくなる。僕みたい に、他と比べずに、良く見て、良く 聞いて、知らずに「まさか！心を和歌山に奪われるとは」とく気付くだろう。

和歌山は僕が“二十歳”という時期を過ごしたことの目撃者になった。この“二十歳”は何ものにも変えられないと言っても、過言ではないと思う。でも、時は流れ ていくから、僕も、今まで出会った人も、新しいこと目指すために、前へ進まないといけない。悲しい気持ちは？全くない。むしろ未来に起こることを待ち遠しく思っている。いつもエルヴィス・プレスリーみたいな髪型をしている洋さんはどんな先生になるのかな？美容師専門学校に通ったリョオは美容院を開くのかな？紀ノ川沿いにあるバーっぽい居酒屋はまだインスタント焼きそばを使ったとは思えないぐらい、美味しい焼きそばを作ってるのかな？淡島神社の人形は今よりどれだけ増えるのかな？人生における変化をワクワクしながら、僕は歩み続けたい。いつここに戻ってくるのかを知らないけど、必ずここに戻ってくることを約束する。ここに戻ってくるとき、大声で「ただいま！」と叫んで、きっと誰かが昔と変わらないままの笑顔で「おかえりなさい！」と返事してくれると僕は信じている。